

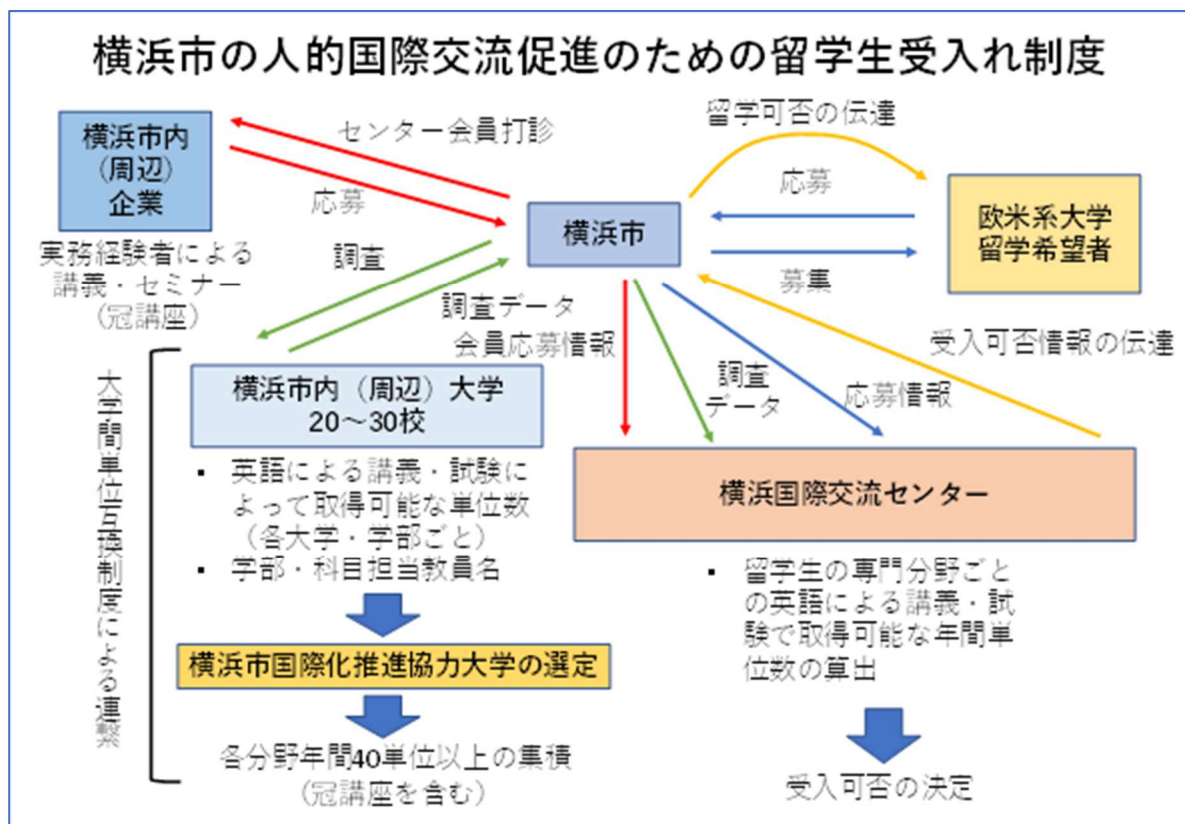
### 3. 寄稿：真の国際都市横浜をめざして

—知の集積地、横浜カルティエ・ラタン構想 関内地区再開発プロジェクト—  
(神奈川大学経済学部教授 経済学博士 小山和伸)

横浜市は 2022 年に予定されていた市庁舎移転後の関内跡地開発について、広く市民から企画アイデアを募集した。私は、ヨーロッパを中心とした大学間の学生及び研究者・教授の交換促進事業を提案した。

私がヨーロッパとの交流にこだわる理由は、まず近隣のアジア諸国との交流に比べて、遠距離のヨーロッパは交換留学生の数がはるかに少ないからである。また、アメリカとの交流組織は既にたくさんあり、改めて促進を図る必要もない。さらに、ヨーロッパは長い歴史を持つためか、日本との文化交流に高い関心を持つ学生が多い。

実際、ヨーロッパ各地の大学を巡ってみると、日本の経済や経営さらに文化全般に対して、極めてまじめで熱心かつ好意的な関心を持つ学生が非常に多いことに気づかされる。こうした学生や研究者たちを横浜に招き、また横浜を起点にして日本各地への留学を斡旋できるようになれば、横浜は真の意味で国際都市としての機能を備えることになる。また、ヨーロッパへの留学に関心を持つ日本全国の学生が、横浜を起点として正確な情報と親密な人的交流を得て、望ましい留学先を決められるようになる。この交流促進の核となる「横浜市国際交流センター」を関内地区に創設すれば、真の国際都市横浜が実現する。



しかし、実際にヨーロッパから留学生を迎えて、大学内で単位を取得させるためには、英語による専門科目の講義が不可欠となる。現在、ほとんどの日本の大学の留学生の内、90 パーセント以

上を中国からの留学生が占めているのは、板書を漢字で書いているからである。日本語留学でもなければ、ヨーロッパの学生たちにとって、漢字の習得はほとんど絶望的である。日本の経済や経営管理を勉強するために、例えば 2~3 年間の日本語習得期間が必要となれば、ヨーロッパの学生にとっては門を閉ざされているに等しい。

現在、ヨーロッパ各国の大学は、国際交流のために英語による講義を充実させている。例えば、1987年に設立されたエラスムス計画(ERASMUS, European Region Action Scheme for the Mobility of University Students)は、EU加盟国間での大学生・教員間の国際交流を目指している。この制度は、2014年にERASMUS+として拡張され、日本を含むEU外の学生・教員等の国際交流を促進している。

2020年1月31日イギリスがEUを離脱し、EU内に英語を母国語とする国はなくなったが、今でもEU内では英語が共通言語として使用されている。もし日本が、ERASMUS+のような若者を中心とした国際交流の潮流に、本気で乗ってゆこうとするなら、大学における専門教育科目の英語による講義・ゼミナールは、必須条件である。

しかし、ごく一部の有名私立大学を除けば、英語による専門科目教育の実態は、甚だおぼつかなく、一学部一年間でせいぜい20単位くらいしかそろわない。学生が留年せずに進級するためには、大体一年間に40単位が必要とされる。半年のセメスターで1科目2単位とすれば、ヨーロッパからの留学生には、少なくとも20科目の英語による講義・ゼミナールが用意されねばならない。

そこで、関内地区に組織される「国際交流センター」が、横浜市内周辺地域の大学間による単位互換制度を活用して、市内周辺の複数の大学にまたがって、40単位を調達できる調整を行うことが期待される。これをさらに、各大学のヨーロッパの大学との単位互換制度と組み合わせれば、ヨーロッパからの留学は著しく促進される。

例えば、神奈川大学の経済学部では、英語による講義が16単位、横浜市大経済学部で14単位、横浜商科大学で12単位、横浜国大で8単位そろうとすると、合計で50単位になる。これらの市内大学は、大学間の単位互換制度を提携しているので、例えば、これらの単位を神奈川大学経済学部の単位に置き換えられる。神奈川大学はERASMUS+に提携しているから、ヨーロッパの提携校なら、この神奈川大学の単位は自動的にヨーロッパの大学の単位として認定される。このような仕組みを作れば、ヨーロッパからの留学生は、横浜市内周辺の複数の大学で講義を受けながら、留年の憂いなく日本の専門教育を習得することができる。

現在、日本の大学では、大学間の国際交流は各大学が個別に、いわば蝸壺的に進めている。例えば、神奈川大学経済学部は、バルト三国のエストニア・ラトビア・リトアニアの大学との交流が盛んであるが、アラビア地方の大学との提携関係はない。ところが、東海大学はアラビア地方の大学との提携が、非常に盛んであると聞いている。

現状では、もし神奈川大学にアラビアへの留学を希望する学生がいても、留学先提携校がないので、大学間交流としての留学は不可能である。しかし、ここで「横浜市国際交流センター」が仲

介の労を取り、東海大学と提携するアラビアの大学に神大生を留学させ、そこで取った単位を一度東海大学の単位に読み替え、さらにその単位を横浜市内大学間単位互換制度によって、神奈川大学の単位に置き換える。

このような制度的工夫に依れば、横浜市内・周辺の大学生は、市内・周辺大学が提携する海外の全大学に留学先の選択肢を広げることができる。つまり、国際交流センターは、市内・周辺大学の海外提携校を、その科目・教員・講義形式・評価に至る情報をストックとして保有し、学生の興味関心と適合する留学先を推奨することができるようになる。

さらに、将来的にはヨーロッパ各国からの教員や学生を国際センターに招き、そこで講義やセミナーを実施し、学生達が自らの興味関心や教員との相性などを実体験できる機会を設けることが望ましい。すなわち、言わば横浜では「留学前留学」が体験できるという機会を整備する。これは、同様にヨーロッパからの留学生に対しても、大学の枠を超えた日本の教授との交流の機会を提供することになる。

かつて、エリートたちがラテン語で話をしていたパリの街角は「カルティエ・ラタン」と名付けられた。関内地区が本当に国際的エリートの集積地になるためには、教室での議論の続きを町のカフェで、またビストロでグラスを傾けながら交わし、終電を気にすることなく近くのドミトリーに安価に泊まれるような街づくりが求められる。若い学生たちと、ノーベル賞級の世界有数の学者たちとの議論が、当たり前のように夜遅くまで続くような、知の国際的集積都市横浜の近未来を切望している。



パリの町並み



イスタンブールの町並み



留学生交流会  
(神奈川大学小山研究室)